

令和7年度学校評価表

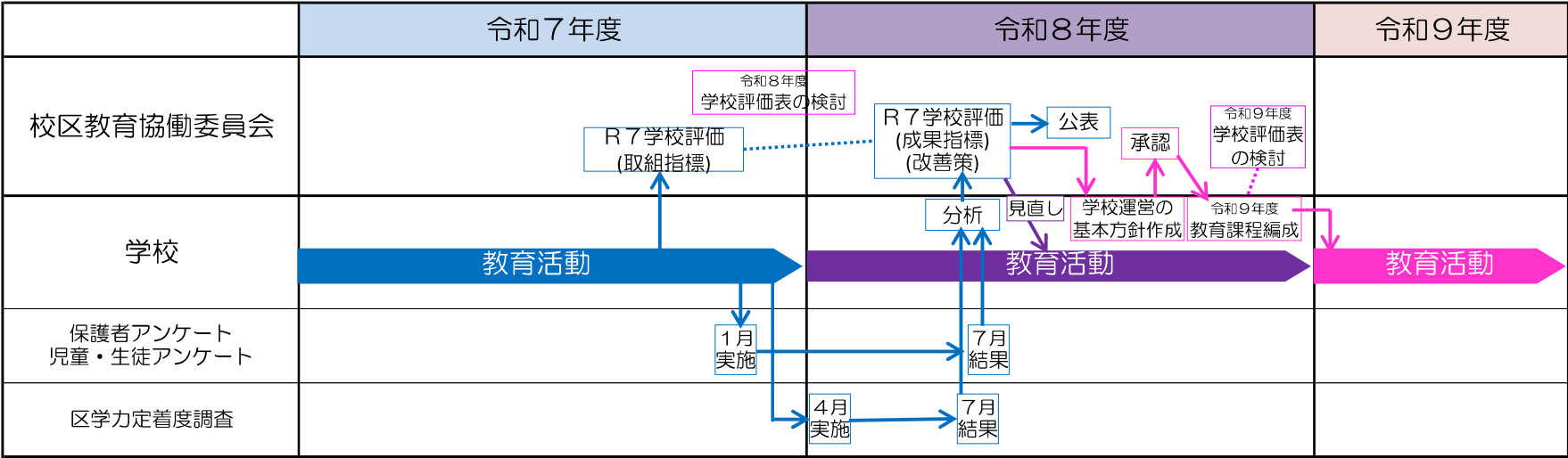
品川区立荏原第一中学校 校長 黒田 佳昌
荏原第一中学校校区教育協働委員会 委員長 北神 正行

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正 令和5年3月24日 教育長決定 要綱第5号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

- (1) 学力に関すること。
- (2) 人間性や社会性に関すること。
- (3) 体力・健康に関すること。
- (4) いじめ防止の取組に関すること。
- (5) 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※令和7年度の学校評価が令和8年度および令和9年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



評価項目1 学力に関すること

重点目標		・生徒を主語にした授業づくりの実践 ・各調査やアンケートで生徒の実態を把握しながら、指導と評価の一体化を目指した授業改善を行う。 ・主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改革を推し進める ・校内研修を充実させる。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	各授業で80%の生徒が、「授業に主体的に参加できた」と感じている。(授業アンケート)	生徒による自己評価肯定率:95%	A	生徒の自己評価肯定率が95%と非常に高い水準に達していることから、「生徒が主語の授業づくり」は大きな成果を上げているといえる。この成果を持続・発展させ、より質の高い主体的な学びへとつなげていくことが今後の課題だと考える。改善策として、まず、学び合いの質を高めるために、役割分担の明確化や発問の工夫を行い、すべての生徒が思考に関与できるような授業設計を行う。また、振り返り活動については、「何が分かったか」だけでなく、「どのように考えたか」「次にどう生かすか」といった視点を取り入れ、学びの循環を意識した指導を行っていく。このような指導を通して「深い学び」へと確実に近づけていく授業改善を進めることで、生徒一人ひとりの資質・能力の一層の育成を図っていく。
	生徒(たち)が考える時間を確保する。グループによる学び合いを実践する。授業や単元の振り返りを行う。	校内研修で「生徒が主語の授業作り」を主題とし、相互授業観察を行いながら研鑽を積んだ。そのことを通し、各教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせ、深い学びに向かうよう、学び合う必要性のある課題を設定し、左記の取り組みを実践することができた。	A	
②	各授業で80%の生徒が「自分の考えを広め、深めることができている」と感じる。(授業アンケート)	生徒による自己評価肯定率:90%	A	成果指標において、生徒の自己評価肯定率が90%と高い水準に達しており、ICT機器の活用や協働的な学習活動を通して、生徒が自らの考えを広め深める実感を得られていることは大きな成果である。特に、問題解決学習の中で話し合いや発表の場面を意図的に設定し、思考ツールとして日常的にiPadを活用している点から、授業改善に向けた教員の意識の高まりも見られる。今後は、協同的な学習においてグループ内での役割を明確にする、話し合いのルールを共有する、個人で思考する時間を設けるなどし、すべての生徒の参加を促し、より一層充実した学びの実現につなげていく。
	ICT機器を積極的に活用する。考える場面、少人数での話し合い・協働作業、発表の場面を意図的に設定する。	問題解決学習でグループで話し合いをし、発表するなど、生徒が自分の考えを広め深めることができる活動を計画的に設定するという教員の意識が高まっている。その際思考のツールとして日常的にiPadを活用できた。	A	
③	個別最適な学びを充実していくために、基礎的、基本的な知識の習得を行う。	校内研修で「生徒が主語の授業作り」において、生徒が主体的に学習に参加できるよう、学習内容を選択可能にする、学習ペースを個別化するなどし、基礎的、基本的な知識の習得に取り組んだ。	A	基礎的・基本的な知識の習得に向けた取組は、授業改善や学校全体での実践を通して着実に進められている。一方で、今後の課題は個別最適な学びのさらなる充実である。まず、学習の自律化に関しては、学習計画の立て方についての指導は行われているものの、生徒自身が実際に計画を立て、実行し、振り返る段階までには十分に至っていない点がある。また、学習内容や進度の個別化は進んでいるが、生徒一人ひとりの理解度やつまずきに応じた支援の質をさらに高めていく必要がある。加えて、コンテストやテストによる成功体験についても、目標設定が画一的になりやすく、すべての生徒にとって適切な達成感につながっていない可能性がある。これらの課題を踏まえ、今後は学習計画の作成から実行、振り返りまでを体系的に行う機会を意図的に設定し、生徒が主体的に学習を進める力の育成を図ることが重要である。さらに、個人ごとの目標設定を取り入れ、小さな達成を積み重ねることで、すべての生徒が成功体験を実感できるよう工夫することも大切である。学習内容だけでなく学び方の選択や振り返り
	生徒の思考の流れやつまずく可能性のある事柄を予想し、必要な手立てを用意する。	授業の最初に注意点やつまづきやすい例を周知する、スモールステップで考えさせる、つまづく事柄を予想し、自分で気づいて回避できるよう声掛けをするなど、多くの教員が必要な手立てを用意し、生徒自身が考え、生徒自身が解答にたどりつけるよう支援した。	A	
	計算力、漢字の書き取り力、スペリング力のコンテストや単元テストを行い、自己の目標点をクリアする成功体験を積み、学習意欲を高める。	学校全体での計算コンテストの実施、年間計画や単元計画の中で、学習到達点を用意し、一つ一つ必要な力を身につけられるよう計画し実行し、学習意欲の向上に努めた。	B	
	定期考査前に学習計画の立て方を指導し、自ら学習を進めることができる「自律的学習者」を育てる。	学習の仕方は助言する、計画の立て方を説明することは実施されているが、実際に計画を立てさせるところまでには至っていないケースが見られる。	B	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目2 人間性や社会性に関すること

重点目標		・豊かな心を育み、人権を尊重する生徒の育成 ・あらゆる偏見や差別をなくし、生徒一人ひとりがかけがえのない人間として尊重される人権教育推進を図る。 ・生徒が主体性をもって実践できる行動力、社会に貢献できる実践力を身につけさせる。 ・考え方の違いを丁寧に対話を通して、合意形成を図る力を身に付けさせる。		
評価指標	最上段：成果指標	最上段：成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降：取組指標	2段目以降：取組指標の達成状況の説明		
①	90%以上の生徒が、「自分の大切さとともに他の人の大切さを認め、様々な場面で他の人の気持ちを大切にしている行動や態度がとれている」と感じている。（生徒アンケート）	生徒による自己評価肯定率：96%	A	生徒の人権意識や他者理解は着実に高まっており、生徒アンケートにおいても高い肯定的評価が得られている。しかしながら、その意識が日常の具体的な行動として継続的に表れているかについては、引き続き丁寧に見取っていく必要がある。今後は、校内研修や相互授業参観を通して教員のファシリテーション力の向上を図り、対話を重視した授業づくりの充実により一層努める。加えて、多様な意見を尊重しながら合意形成を図る過程を大切に、対話の質を一層高めていく。さらに、学級活動や学校行事等において実践の場を意図的に設定し、授業で得た学びを日常生活へとつなげていく。今後も「生徒が主語の学校づくり」の実現に向けて、教職員が共通理解のもと組織的に取組を推進し、生徒一人一人が自他を大切にしながら主体的に行動できる力の育成を目指していく。
	市民科を中心とした人権尊重に関する様々な人権課題を通して、自分の大切さとともに他の人の大切さを認め、様々な場面で具体的な態度や行動がとれるよう指導する。	市民科では人権について考える授業や人権課題を生徒自らが調べ標語を作成するなどした。また道徳授業の充実も図られてきており、他者とともによりよく生きるため、学習を通して考えが変わったことなどを具体的に振り返り、今後の生活に生かせるようにした。	A	
	学級活動や各授業を通して、生徒が違いを認め、協力し合える学級づくりをすすめる。意見の一致が見られない時は、教員は生徒同士が対話を通して各自が納得できる案を引き出すファシリテーターの役割を果たす。	左記の取り組み指標を達成することは、学校経営計画の「生徒が主語の学校づくり」を目指すことにつながっている。「生徒が主語の学校づくり」は教員全員が高い意識をもって取り組んでいる現状があり、教員一人一人が左記の内容を意識しながら取り組むことができた。	A	
②	85%以上の生徒が「生徒が主体となって力を発揮できている学校」と感じている。（生徒アンケート）	生徒による自己評価肯定率：96%	A	成果指標を上回る高い自己評価肯定率が得られている。学校行事や委員会活動等において、生徒一人一人に役割を持たせ、その遂行を支援するとともに、生徒の意見を取り入れた活動を展開してきたことが、生徒の主体的な意識の向上につながっていると考えられる。一方で、主体性を十分に発揮できていない生徒が主体的に関わることができるよう、個々の状況に応じた役割設定や段階的な支援を行うことを意識して取り組んでいくことが大切である。同時に、役割を与えること自体が目的化し、一部の生徒に負担が偏ったり、形式的な参加にとどまることがないように注視しながら進めていく。
	学校、学年行事を通して、生徒一人一人が自分の役割を果たせるよう支援する。	全ての生徒に役割を与え、責務を全うするよう支援したり、自分の役割を認識できるように声掛けを行ったり、誰かのために行動している生徒に対して感謝の言葉を意識的に声掛けしたりしながら、生徒一人一人が自分の役割を果たせるよう支援した。	A	
	生徒会や委員会活動の活性化を図り、生徒の意見が反映され、生徒が主体的に取り組む活動を計画的に実施する。	自分たちで課題を見つけ改善策を考えさせたり、生徒たちのやりたいことを出し合い、実現するための方策を考えさせたり、中央委員会では各委員会の話し合いの結果を集約し、生徒同士が委員会を超えた協力や取り組みにちて話し合うなど、生徒の意見が反映され、生徒が主体的に取り組む活動を意識的に実践した。	A	
③	90%以上の生徒が「廊下ですれ違う人に挨拶をしている、チャイム着席をしている」と感じている。（生徒アンケート）	生徒による自己評価肯定率：97%	A	挨拶、チャイム前着席とも良好な状態にあると言える。今後の課題は、挨拶やチャイム前着席の取り組みが「習慣として定着しているか」というより一層の質の面の向上のため、挨拶の意義や相手を意識した行動の大切さについて考えさせる機会学を意識的に設けていく。チャイム前着席については、学級委員など生徒の呼びかけがない状況でも生徒一人一人が時計を見て主体的に行動できるよう指導の工夫を図っていく。
	教職員が率先して挨拶をすることで、習慣化を促す。教員がチャイムが鳴る前に教室におり、チャイムが鳴ると同時に授業が開始できる雰囲気を醸成する。	1日に同じ生徒とでもすれ違ったら何度でも挨拶している、生徒に挨拶し、生徒の小さな変化に気づくよう努めている等、教員が率先して挨拶をする習慣が定着している。着席チャイムでは、生徒がチャイム前着席をするのを見届けている、生徒がチャイムの前から授業に向き合える雰囲気を作れるようにしている等、教員が高い意識をもって取り組んでいる。	A	

A＝十分達成できた B＝おおむね達成できた C＝未達成

令和7年度 学校評価 品川区立荏原第一中学校

評価項目3 体力・健康に関すること

重点目標		・体の健康と心の健康を保てるよう安全対策を充実させる。 ・体の健康と心の健康を保つために健康管理、運動の大切さを意識させる。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	90%以上の生徒が「トリプルA(安全・安心・温かい)が保たれている学校」と感じている。(生徒アンケート)	生徒による自己評価肯定率:91%	A	課題として、まず「安全・安心・温かい」環境の質のさらなる向上が挙げられる。現状において高い肯定率が得られているものの、一部の生徒にとっては十分に安心感や居場所を感じられていない可能性もある。今後は、生徒アンケートの自由記述や日常の観察を通して個々の実態をより丁寧に把握し、個別の状況に応じたきめ細かな支援を一層充実させていく必要がある。 次に、未然防止の視点のより一層の強化も重要である。不安や悩みが深刻化する前の段階での気づきや働きかけをさらに強化する必要がある。そのために、日常的な観察や声掛け、デイケンや自分LOGの十分な活用、日頃からの関係づくりを通して、安心して相談できる環境の充実をより推進していく。上記の点を踏まえ、今後も現在の取り組みを継続・発展させながら、「安全・安心・温かい」環境を全ての生徒が実感できるよう、個別最適な支援と組織的な対応のさらなる充実を図っていく。
	アレルギー疾患対策を徹底して行う。配膳までにスリーステップの確認を行い、確実な配膳を実施する。教職員にエビベン研修を実施する。	アレルギー疾患への対策、対応として、配膳までにスリーステップを確実にを行い、適切な手順を踏み、適切な配膳が行われている。また、エビベン研修は年度当初に研修会を行い、教員全員参加をした。	A	
	スクールカウンセラーによる第7学年への全員面談を実施し、不安や悩みを抱える生徒の早期発見、早期対応を実行する。	7学年への全員面談を実施し、スクールカウンセラーと顔を合わせることで、相談しやすい環境づくりの一助となっている。また、適宜相談先の一つとしてスクールカウンセラーの存在をアナウンスしているため、生徒、保護者ともに必要に応じてスクールカウンセラーに相談を行っている。	A	
	支援会議、不登校対策会議にて生徒の実態や状況把握に努め、その情報を全体で共有し、よりよい支援へとつなげ、一人一人に寄り添った支援の充実を図る。	支援会議、不登校対策会議では、各生徒の教室内での対応、学年単位での対応、学校単位での対応、外部を含めた対応を検討し支援に繋げている。また、支援が必要な生徒、不登校の生徒について、学年で細かく状況、情報を共有し、少しでも気になることがある際は、必ず会議で報告し、組織で対応できるようにしている。	A	
	教師は生徒の声に最後まで丁寧に耳を傾け、共感的に理解し、励まし支援することで生徒(たち)と温かい関係を築く。	生徒が話しやすい相手になれるよう積極的に日頃の会話をし、授業内だけでなく、休み時間や放課後などに教室フロアにいて、生徒と積極的に話すことを心がけている、時間をかけて、生徒の本音を聞き出すまで粘り強く傾聴と発問を行い、丁寧な指導を心がけている等、教員は真摯に取り組んでいた。	A	
②	85%以上の生徒が「運動の大切さ、健康管理の大切さ(睡眠、食事、感染予防)を意識している」と感じている。(生徒アンケート)	生徒による自己評価肯定率:85%	A	今後の課題として、運動や健康管理に対する意識をさらに深めることが挙げられる。現状では生徒が主体的に行事や部活動に取り組む姿が見られ、運動の楽しさを実感できている一方で、日常生活における健康管理(睡眠や食事、感染予防など)への意識が十分に日常化しているかについては、まだ課題が残る。今後は、授業や生活指導の中で具体的な生活習慣への意識付けを強化し、運動と生活習慣の関連性を理解させる取り組みを充実させていく。
	生徒会役員や運動委員会、学級委員会が中心となり運動・スポーツによる自治活動を通して、体力向上やスポーツの楽しさを味わわせる。	学年での球技大会や生徒会のレクリエーション大会など、生徒が自ら企画して行う行事がうまく進むようサポートをしている、生徒たちが自分たちで行事や委員会を運営することで、自分たちが主役であることを認識し、主体的に取り組むことができる等、自治活動を大切に、スポーツの楽しさを感じられるよう取り組んだ。	A	
	保健体育の授業、運動会、球技大会、部活動などの取組を通して、一人一人が主体的に取り組めるように支援し、運動に対する楽しさや親しみを感ぜられるようにする。	部活動にて、生徒同士で色々な場面にていろいろな事柄を決め、実践することを通して、主体的に活動することの楽しさを学んだと感ぜられたり、運動会や部活動等で前向きに活動する姿が多くみられた。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成

評価項目4 いじめの防止の取組に関すること

重点目標		・いじめ防止対策推進法の周知、理解促進 ・相談窓口の充実 ・多様性や互いのよさを認め合える態度の育成		
評価指標	最上段：成果指標	最上段：成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降：取組指標	2段目以降：取組指標の達成状況の説明		
①	100%の生徒が「いじめは絶対に許されないことであり、いじめを絶対に許してはいけな いと思う」と感じている。(生徒アンケート)	生徒による自己評価肯定率：99%	B	今後の課題として、まずいじめ防止意識の「理解」から「実際の行動への定着」への発展が挙げられる。生徒アンケートでは高い肯定率が得られているものの、意識が高くても、具体的な場面でどのように行動すべきかを迷う生徒や、周囲の状況に流されやすい生徒が存在する可能性がある。トリプルチェンジの授業内で、いじめの兆候に気づいた際の具体的な対応行動として示していることを、生徒自身が主体的に行動できるよう指導の工夫を進める必要がある。また、保護者や地域との連携をさらに深め、学校全体で安心・安全な環境を維持していきたい。
	荏原第一中学校いじめ防止基本方針、いじめ防止対策推進法の周知を保護者、生徒に行う。	保護者への周知として、年度初めの保護者会で説明、文書配布、相談窓口の提示、質疑応答の時間の確保を実施した。生徒への周知として、年度当初の全校集会にていじめ防止基本方針の趣旨といじめの定義を具体的に説明、その後必要に応じて適宜説明を行った。	A	
	いじめ防止に関する授業を年間3回実施する。	トリプルチェンジの授業を各学期1回、年3回実施した。また、道徳教育、人権教育と関連付けて授業を実施し、いじめ防止に務めた。	A	
②	90%以上の生徒が「不安や悩みがあるとき、相談できる人(友達、先生、SCなど)が学校内にいる」と感じてる。(生徒アンケート)	生徒による自己評価肯定率：93%	A	生徒アンケートでは高い肯定率が得られているが、7%の生徒は相談することに対して躊躇を感じている可能性がある。その対応策として、SCへの相談は雑談でも、困っていても利用できることを周知し、相談＝重いという認識の心理的ハードルを下げるようにする。また来年度よりSCが2名体制になり、SSWも配置されることから、より一層の横の連携を強化し、全ての生徒が安心して悩みを打ち明けられる学校づくりを推進していく。
	学校には、教員の他に不安や悩みを相談できる人がいることを周知する。SC在室日を周知する。教員は常日頃から生徒(たち)とのコミュニケーションを大切に、相談しやすい人間関係を構築する。	相談がある場合はどの先生でも対応できること、また、相談相手はSCをはじめ様々な大人もいることを、安全指導朝会や市民科の授業、学年通信、学級通信で発信している。教員は日頃から、休み時間に教室フロアにおり生徒(たち)とコミュニケーションをとった い 前向きな声掛けを意識し実践したり、相談しやすい人間関係の構築に尽力してい	A	
③	90%以上の生徒が「自分と違う意見や考え、気持ちも大切にできている」と感じている。(生徒アンケート)	生徒による自己評価肯定率：99%	A	現状では道徳やウェルビーイングの授業、学級活動、部活動などの場で生徒同士が話し合い、合意形成や意思決定を行う機会が設けられ、高い肯定率が得られている。今後は、異なる価値観や意見への配慮が自然に発揮される環境づくりにも目を向けていく必要がある。日常の授業や活動の中で、発言が偏る生徒や消極的な生徒にも意見を述べる機会を意識的に設けることで、多様な意見が尊重される文化をより広げる必要がある。教員はファシリテーターとしての役割をさらに工夫し、全員参加型の話し合いを促すようにしていく。
	市民科人間関係形成領域、特に自他理解を道徳の時間、学級活動の時間、ウェルビーイングの時間で充実させる。	道徳の授業にて、役割視点で気持ちを想像したり、考えたり、ウェルビーイング授業で、自分と他者の感じ方や価値観の違いに気づかせたり、学級活動の時間に構成的グループエンカウンターを実施するなどし、自他理解を深められるよう支援している。	A	
	日常の授業や授業外(部活動等)において、生徒同士が話し合い、合意形成や意思決定の場面を日常的に設定する。	部活動、学級活動等学校生活全般にて、多くの教員が話し合いの場を都度設定し、お互いの意見を聞き合うことを通して自分たちの活動方法やルール、計画を決めている。また授業においても、生徒同士が意見交換し、協働的に取り組む時間を設けている。	A	

A＝十分達成できた B＝おおむね達成できた C＝未達成

令和7年度 学校評価 品川区立荏原第一中学校

評価項目5 (特色ある教育活動に関すること)

重点目標		・保護者や地域の期待に応え信頼される学校の推進 ・地域と共にある学校づくりの推進		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	80%以上の保護者が「現在通っている学校に満足している」と感じている。(品川区保護者アンケート)	品川区保護者アンケート肯定率:89.4%	A	課題として、まず学校からの情報発信の充実が挙げられる。現状では学年だよりやHP等で適時情報を提供しているものの、利便性、適時性、更新頻度の観点で情報発信において改善の余地がある。余裕のある情報掲載、掲載情報が終了した際の適切な対応、継続的、計画的な更新を図っていく。次に教職員のサービス意識と安全管理を継続していくことも課題である。サービス事故年間0件を維持するため、引き続き職員研修や日常的な報告・連絡・相談の徹底を行うとともに、リスクマネジメント意識を職員全体で共有し、未然防止策を定期的に見直していく。
	保護者と教職員でのラウンドテーブルミーティングを実施し、相互理解を図る。	全教員が参加し、保護者とのラウンドテーブルが実施された。保護者との対話により、教員との信頼関係を築き、相互理解を深める一助となり、有意義な時間となった。	B	
	教職員サービス事故年間0件を引き続き継続する。	サービス事故年間0件は達成できた。サービス事故防止への意識を高め、職員が規則や倫理を正しく理解するよう、年に2回のサービス事故防止研修を実施している。日常より報告・連絡・相談を徹底し、ミスや異常に気づいたらすぐ報告する、一人で抱え込まない環境づくりを推進した。	A	
	HP、学校だより、学年だよりを活用し、学校から積極的に適時性のある情報発信を行う。	定期的に学年だより、学年だよりを発行し、学校・学年の様子を伝え、学校生活への理解を深めていただけたよう務めた。HPでは、適時性のある情報発信を心がけたが、よりよいHPを目指し、工夫が必要である。	B	
②	地域人材の積極的な活用を図る。地域でのボランティア活動を実施する。	地域のみなさんと学ぶ防災授業、地域のご家庭に参加していただいた赤ちゃんふれあい授業、152名の地域の方に参加していただいたトークフォークダンスなど、地域人材、外部人材との連携授業を数多く実施した。	A	現在は多様な外部人材との連携による体験活動が充実しており、体験活動を通して気づきや学びは得られている。今後は、それぞれの取り組みが単発的な経験にとどまらず、生徒の学びとして蓄積されるようにする必要がある。そのために、各活動のねらいや学びを明確にしていく。かつ、日常生活の中での行動変容につなげるため、体験だけでなく知識の習得の機会の充実を図る。ボランティア活動は限られた生徒の参加となっているが、学校生活を送りながら、ボランティア活動に参加する時間的の確保が難しい生徒も多いのが現状である。そのため、より多くの生徒が地域社会と関わりながら学びを深められる環境づくりを充実させていくことで、生徒一人一人の地域社会の一員である意識を高めていくことを目指していく。
	トークフォークダンス、デフサッカー・フットサル体験学習、桂宮治師匠の落語教室、観劇教室等、多様性、多文化理解の取り組みを実施する。	様々な体験を通して多様性、多文化理解の取り組みを実施することができた。一例として品川区主張大会に出場し、最優秀賞に選ばれた本校生徒の「見えないバリアを超えていく」の中で、授業でブラインドサッカーを体験し、見えない不便さを実感できる貴重な経験だったとの感想が述べられた。	A	
	生徒会を中心に荏原第一地区区民祭りへ引き続き参加する。	今年度も例年に引き続き、荏原第一地区区民祭りに生徒会役員の生徒たちが参加した。かき氷屋を出店し、生徒たちが中心となり運営した。最初はぎこちない連携だったが、仕事を進めながらどうすればお客様をお待たせせずかき氷を提供できるかを考え、最後は全くお客様をお待たせすることなくスムーズに提供できる協力体制を築くことができた。	A	
	ボランティア部、吹奏楽部を中心に、地域のグループホームでのボランティア活動を行う。	今年度初めての取り組みとして、地域のグループホームでのボランティアを実施した。吹奏楽部は演奏を披露し、ボランティア部は個別で対話した。先方にはとても喜んでいただけ、参加生徒たちにも有意義な経験となった。	A	

A=十分達成できた B=おおむね達成できた C=未達成